

〔共同研究：「大学生」に関する総合的研究（Ⅱ）〕

大学生の生活満足度の規定要因

——全国26大学調査から——

岩 田 考

1. はじめに

本稿¹⁾の目的は、大学生を対象に実施した質問紙調査のデータを用いて、生活満足度の規定要因を明らかにすることにある。このことを通じて、若者の生活満足度が低下していない背景について考察したい。

平成19年度版『国民生活白書—つながりが築く豊かな国民生活—』では、人々の生活満足度が低下していることが指摘された（内閣府、2007）。確かに、図1のように、2005年までの内閣府「国民生活選好度調査」の結果をみると、「満足している」や「まあ満足している」と回答している人が減少し、「どちらかといえば不満である」や「不満である」と回答した人の割合は高まっている。

ただし、2008年の調査では、「満足している」や「まあ満足している」が増え、満足度は高まっている。また、内閣府の「国民生活に関する世論調査」やNHK放送文化研究所の「日本人の意識調査」など、生活満足度を長期にわたって把握しているその他の調査では、明確な低下傾向は必ずしもみられない。しかしながら、人々の生活満足度が年々高まるという傾向があるわけでもない。我われの住む日本社会は、人々を幸福にする方向には向かっていないのであろうか。

就職氷河期の再来が言われたように、近年若者は厳しい雇用環境におかれてきた（図2）。また、「友だち地獄」（土井 2008）という指摘にあるように身近な対人関係においても恵まれた環境にはないとされてきた。若者をとりまく環境は様々な面において厳しさを増してい

1) 本稿は、桃山学院大学総合研究所共同プロジェクト「『大学生』に関する総合的研究（Ⅱ）」（研究代表：木下栄二）の研究成果の一部である。プロジェクトは、「主に本学学生を対象にして、授業をはじめとするキャンパスライフと彼らの将来設計に焦点をあてながら、現代大学生の特徴について明らかにすることを目的」として行われた「『大学生』に関する総合的研究」を発展的に継続したものである。また、本稿は第84回日本社会学会大会（於：関西大学2011年9月18日）で発表した「大学生の生活と意識（5）—なぜ若者の生活満足度は低下しないのか—」を加筆・修正したものである。この発表の直前に、その後話題となった古市憲寿の『絶望の国の幸福な若者たち』が刊行され、若者の幸福感などに関する多くの議論がなされた。残念ながら、本稿では、そのような議論を十分に取り入れることができていない。若者の生活満足度や幸福感などについて考察するための基礎的な資料を提供することに主眼をおき、新たに提出された論点などをふまえた分析や考察については今後の課題としたい。

キーワード：大学生、生活満足度、幸福感、友人関係、将来不安

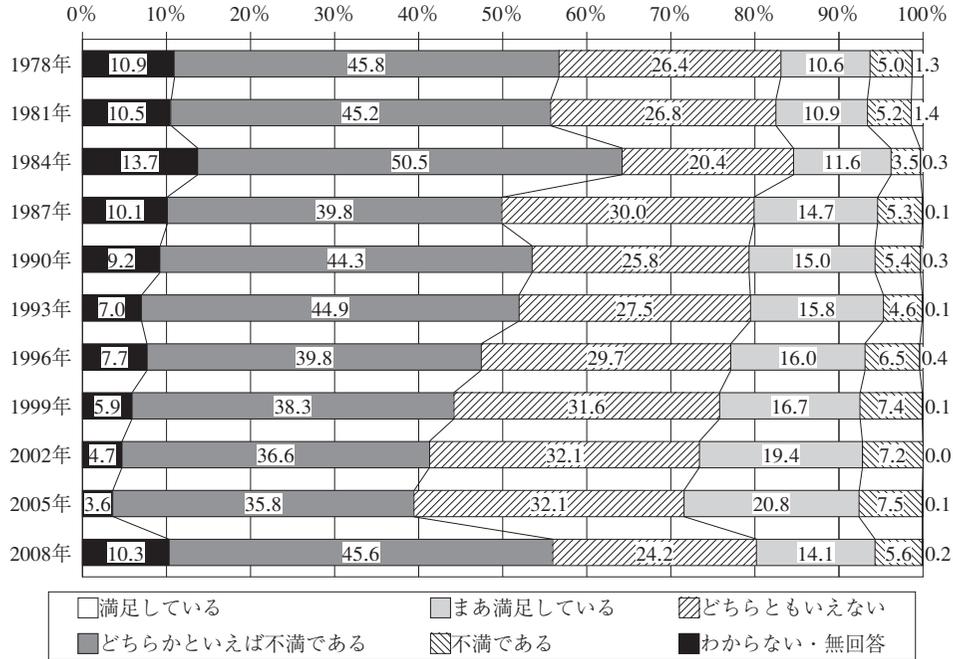


図1 生活満足度の推移

資料) 内閣府「国民生活選好度調査」より。

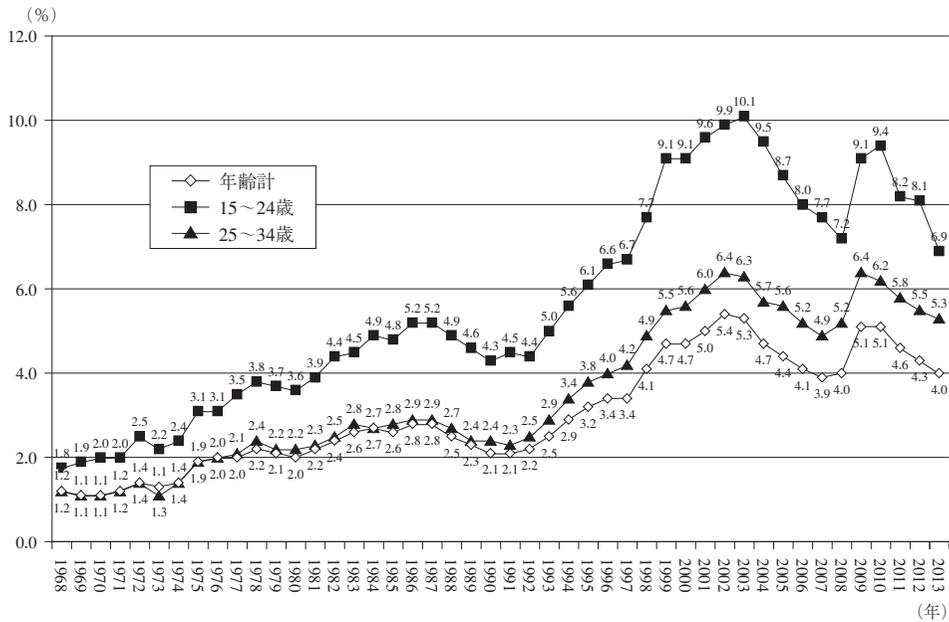


図2 若者の完全失業率の推移

資料) 総務省「労働力調査」より作成。

注) 1968年から1972年の数値に、沖縄県は含まれていない。また、2011年は東日本大震災の影響により補完的に推計した値。

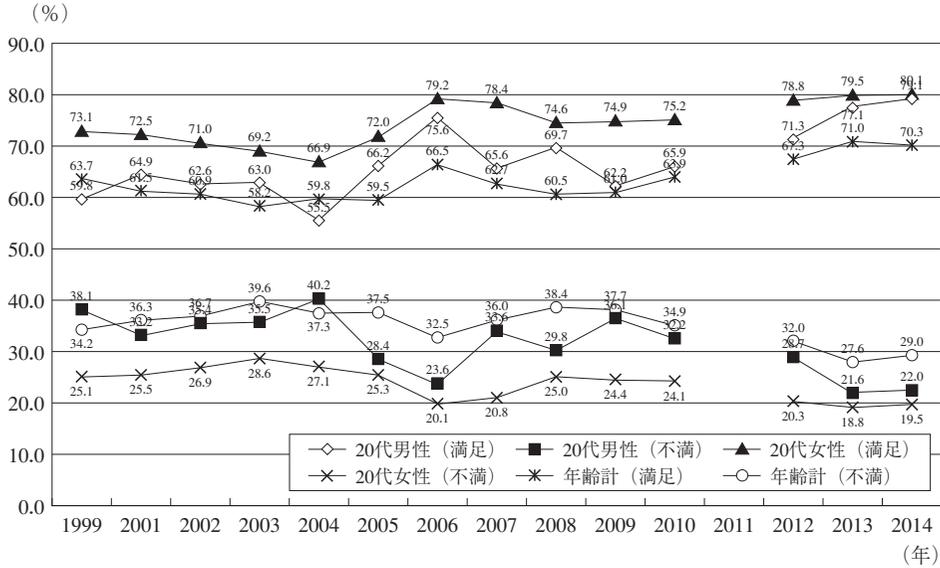


図3 若者の生活満足度の近年の推移

資料) 内閣府「国民生活に関する世論調査」より。

注) 満足は「満足している」と「まあ満足している」の合計の割合(%)。不満は「やや不満だ」と「不満だ」の合計の割合(%)。また、2011年は調査が実施されていない。

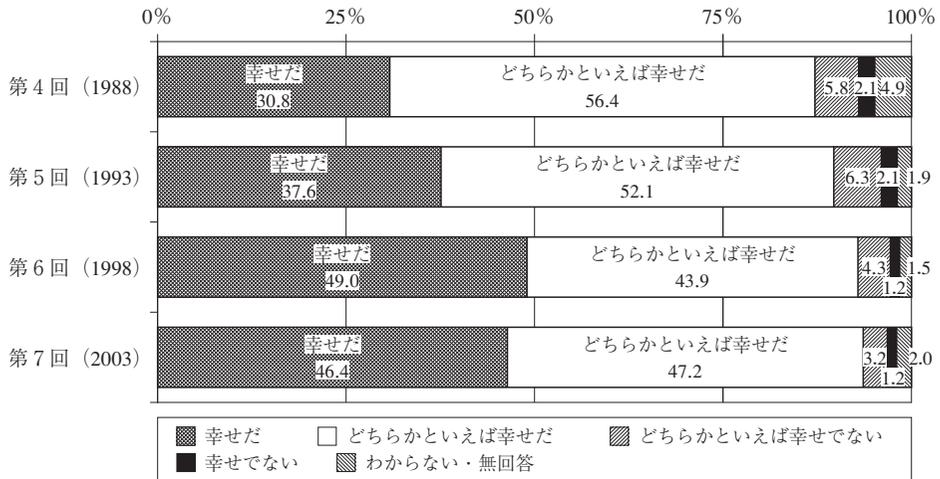


図4 若者の幸福感の推移

資料) 内閣府「世界青年意識調査」より。

るように思われる。しかしながら、図3のように、「国民生活に関する世論調査」の結果を年齢階級別にみると、若者の生活満足度は低下していない。

同様に、幸福感についても、明らかな低下傾向を見いだすことはできない(図4)。生活満足度や主観的幸福度は高い水準で保たれている。非常に厳しい環境におかれているようにみえる若者だが、なぜ生活満足度や主観的幸福度は低下していないのであろうか。

まず本稿では、生活満足度と、基本属性的な変数（性別、年齢）や、所属する大学に関する変数、経済状態や階層に関する変数、身近な人との関係に関する変数、文化活動に関する変数との関連をクロス表などを用いて分析する。その後、重回帰分析によって、生活満足度の規定要因を探る。

2. 調査概要

(1) 調査時期・対象・方法

調査は、2010年9月下旬から10月にかけて、日本全国の大学26校で行ったものである²⁾。調査対象は、社会学系の授業を受講する大学生である。各校の教員に依頼し、授業およびゼミ時間中に、出席学生を対象として質問紙を用いた集合調査を行った。

調査を実施した大学は、国公立6校、私立20校（うち女子大2校）である。地域別では、首都圏14校、関西圏4校、それ以外の地域8校となっている。入学難易度は、大学受験予備校のデータ（代々木ゼミナール入学難易度ランキング）によると、偏差値43～66（平均53.9）となっており、幅広い大学を対象としている。

①調査時期：2010年9月下旬～10月

②調査対象：社会学系の授業を受講する大学生（1回生から4回生）

③調査方法：授業およびゼミ時間中に、出席学生を対象として質問紙を用いた集合調査を行った

(2) 回収票数と回答者の属性

回収票数は2831票となっている。大学所在地と大学種別に関しては、比較的バランスのとれた構成になっているが、私立女子の割合が高めとなっている。さらに、社会学系の授業において調査を実施したため、女子学生の割合が高くなっている。また、4回生にあたる年齢の学生の割合はやや低くなっている。

①大学所在地：首都圏＝50.7%，関西圏＝21.5%，それ以外の地域＝27.8%

②大学種別：国公立＝12.6%，私立＝73.0%，私立女子＝14.4%

③男女比：男＝36.5%，女＝63.5%

④年齢構成：18歳＝14.5%，19歳＝34.9%，20歳＝31.8%，21歳＝12.9%，22歳＝4.9%，23歳＝0.8%，24歳以上＝0.2%

2) 調査は、実施校数を確保するため、平成21年度証券奨学財団調査研究助成金「若年層の家族イメージと恋愛行動」（代表者：弘前大学人文学部准教授 羽瀨一代）が実施する調査と調査票を統合して行った。

本稿において、大学のタイプとは、国公立、私立、私立女子という3カテゴリを意味しており、入学難易度は偏差値55以上を高難易度、54以下を低難易度と分類している。また、都市部とは、首都圏、関西圏、名古屋を範囲としている。

なお、本調査のデータは、ランダムサンプリングによって得られたものではないが、結果の解釈の参考のため、検定結果を示している。

3. なぜ生活満足は低下しないのか

雇用情勢など厳しい環境におかれている若者だが、なぜ生活満足度は低下していないのであろうか。本章では、先行研究における幸福感や生活満足度の規定要因に関する議論をみとめることにしよう。

社会学者のジグムント・バウマンは、物質的豊かさと幸福の関係について、次のように述べている。

「国民総生産」という指標だけが、私たちの幸福の度合いを適切に示し、責任を負えることとみせかけることは、たいてい、間違いを引き起こす。「国民総生産」の数値だけが、人間の幸福を管理できると考えるならば、そのようなみせかけは、意図したことや達成しようとしたこととは反対の結果をもたらし、害をもたらすかもしれない (Bauman 2008=2009: 19)。

つまり、物質的な豊かさだけが人々の幸福感を決めるものではないというわけである。このような指摘は、もちろんバウマン独自のものというわけではない。日常的に我われが語ることと大差はない。

このような指摘の根拠として、しばしば持ち出されるのが、「イースタリンの逆説」あるいは「幸福のパラドックス」と呼ばれるものである。経済学者のリチャード・イースタリン (Easterlin 1974) は、一つの国において、一時点で見たときには、収入と幸福度に相関が見られるが、時系列に見た場合や、多国間で比較を行うと相関関係がみられないことを指摘した³⁾。日本においても、生活満足度とGDPの関係を時系列にみると、相関関係は消滅する。しかし、イースタリンの指摘は、あくまで時系列に見た場合や多国間で比較を行った場合についての指摘である。物質的な豊かさと人々の幸福感や生活満足度が無関係ということではない。

ところで、なぜこのような逆説が生じるのであろうか。この点に関して、いくつかの仮説がだされている (大竹他 2010)。一つは、順応仮説である。つまり、所得が増えて生活水準があがると、その時点では幸福度は上昇するが、すぐにその状況になれてしまうということ

3) 近年の研究では、この逆説に対して否定的な見解も示されている (例えば、Stevenson and Wolfers 2008 など)。

表1 期待水準と生活満足度

		現在の生活に満足している				合計
		あてはまる	ややあてはまる	あまりあてはまらない	あてはまらない	
将来、社会的に高い地位につきたい	あてはまる	22.2%	38.4%	26.9%	12.6%	100.0% (581)
	ややあてはまる	12.1%	53.6%	28.9%	5.4%	100.0% (959)
	あまりあてはまらない	12.9%	50.9%	30.2%	5.9%	100.0% (950)
	あてはまらない	22.1%	42.9%	19.9%	15.0%	100.0% (326)
合計		15.6%	48.3%	27.9%	8.2%	100.0% (2816)

注) 数値は、割合 (%)。 () は実数。 $\chi^2=114.7$ d.f.=9 p=.000

である。また、最も有力とされる仮説として、相対所得仮説がある。これは、まわりとの比較によって、幸福度が決定されるというものである。つまり、自らの所得が増えてもまわりも同じように所得が増えていけば、主観的幸福度は高まらないというわけである。社会学における相対的剝奪の概念と同様な考え方である。このように、幸福感や生活満足度を見ていく際には、単純に時系列にみたその増減だけを問題にすることは注意を要する。

幸福感や生活満足度が、相対的に決定されるという側面にかかわっては、次のような指摘がなされることもある。低経済成長のもとで生活してきた若者は、そもそも期待水準が低いために、達成水準が低くても満足度が低下しないのだ、と。つまり、今の若者は、多くを望まないというのだ。

このような期待水準の低下という指摘は、「嫌消費」をめぐる議論に典型的にみられる。「嫌消費」とは、「収入に見合った支出をしないこと」(松田 2009: 1)を意味する。「嫌消費」という言葉を用いなくとも、若者が以前ほど消費をしなくなったという指摘は他にもみられる(例えば、山岡 2009など)、それらの議論では低経済成長の中で育つことによって、消費欲求が低かったり、上昇志向がなかったり、恋愛に消極的であったりなど、生活に関わる様々な面で期待水準が低下していることが示唆されている⁴⁾。

残念ながら、期待水準の低下と生活満足度の関係を十分に検討するだけのデータを示すことはできないのだが、表1は期待水準の低下のみから生活満足度の高止まりが説明されるわけではないことを示唆している。表1は、「将来、社会的に高い地位につきたい」かどうかと生活満足度との関係を見たものである。確かに、社会的に高い地位につくことを強く否定している者のほうが、中間的な回答をしている者よりも生活満足度が高くなっている。しかし、社会的に高い地位につくことを積極的に肯定する者でも、同じように生活満足度が高くなっているのだ。

このように、期待水準の低下が生活満足度の低下を押しとどめているという側面も否定は

4) 松田(2009)は、「嫌消費」世代の特徴として、「上昇志向」をあげるなど、期待水準が低下していると指摘しているわけではない。

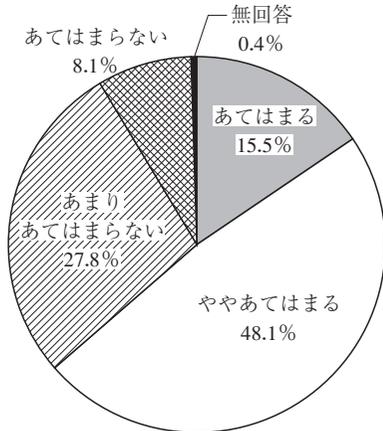


図5 現在の生活に満足しているか (N=2831)

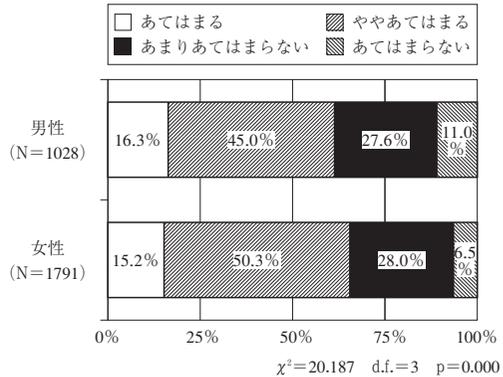


図6 男女別にみた生活満足度

できないが、それだけで十分に説明できるわけでもない。そこで、本稿では、基本属性的な変数（性別、年齢）や、所属する大学に関する変数、経済状態や階層に関する変数、身近な人との関係に関する変数、文化活動に関する変数など、様々な変数と生活満足との関係をみていくことで、大学生の生活満足度の低下を押しとどめている要因を検討する。

4. 大学生の生活満足度

(1) 大学生の生活満足度

今回の調査では、約6割の大学生が現在の生活に満足と回答している（図5）。図6に示したように、〈性別〉では、他の調査と同様、男性よりも女性のほうが満足度が高くなっている。〈年齢〉では、大学生のみを対象としているため、年齢の幅が狭いこともあり、統計的に有意な差はみられなかった。

(2) 所属大学と生活満足度

次に、所属する大学による違いをみてみよう。〈学校種別（国立・私立・私立女子）〉および〈大学所在地（都市部・地方部）〉で、有意差はみられない。〈入学難易度〉に関しては、高難易度の大学のほうが生活満足度は高くなっている（図7）。ただし、相関係数で両者の関係をみると、強い相関がみられるわけではない（Pearson (r)=.277, p=.171/Spearman (ρ)=.344, p=.086）。また、〈入学志望度〉も、生活満足度と関連している。図9に示したように所属している大学が第一志望の者のほうが、生活満足度が高くなっている。

(3) 社会経済的変数と生活満足度

経済状態や階層に関する変数と生活満足度との関係をみてみることにしよう。

〈暮らし向き〉に余裕があるほど、生活満足度は高くなっている（図10）。また、〈アルバ

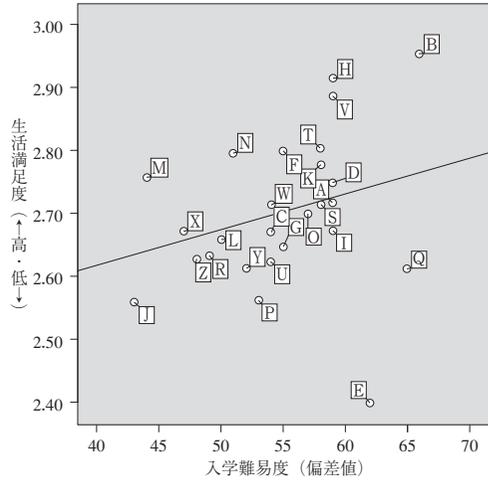
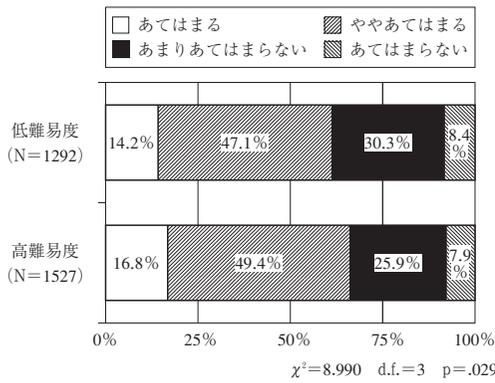


図7 入学難易度別にみた生活満足度

図8 入学難易度と生活満足度の相関関係

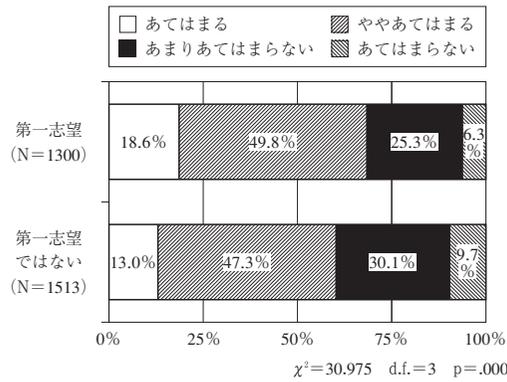


図9 所属大学への入学志望度別にみた生活満足度

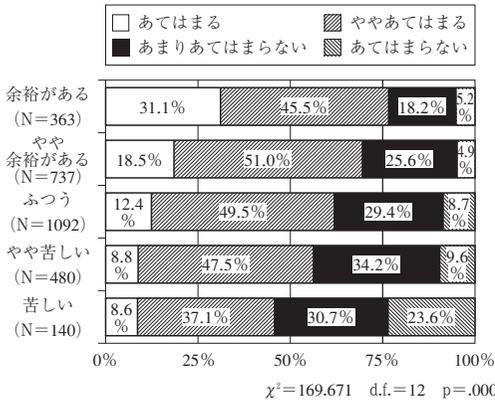


図10 暮らし向き別にみた生活満足度

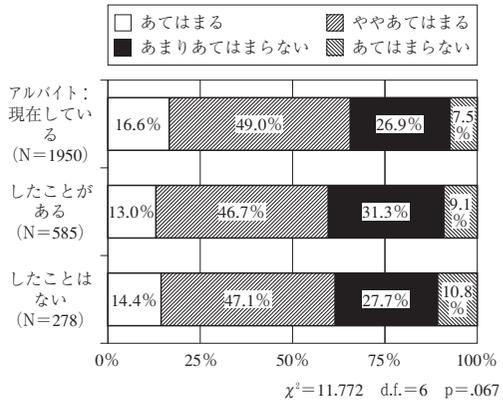


図11 アルバイト経験別にみた生活満足度

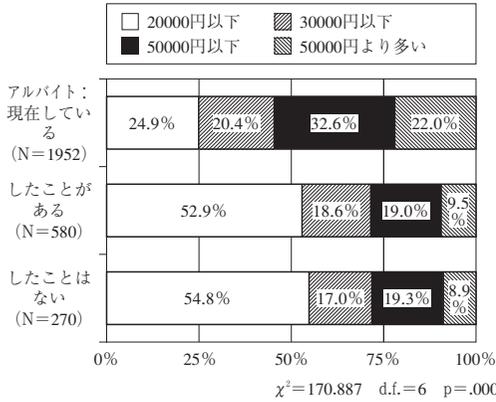


図12 アルバイト経験と自由に使えるお金

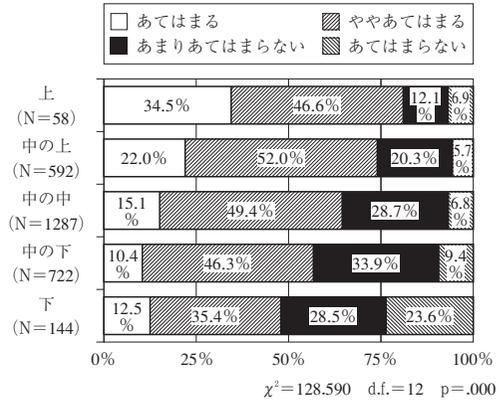


図13 階層帰属意識と生活満足度

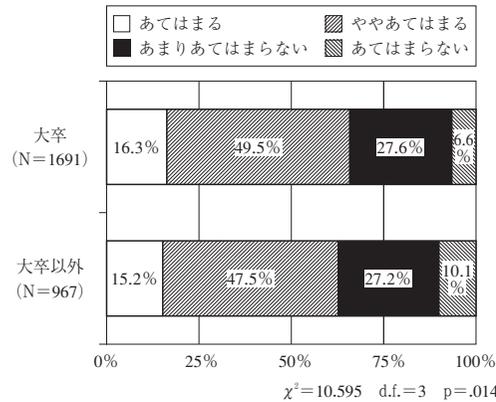


図14 父親の学歴と生活満足度

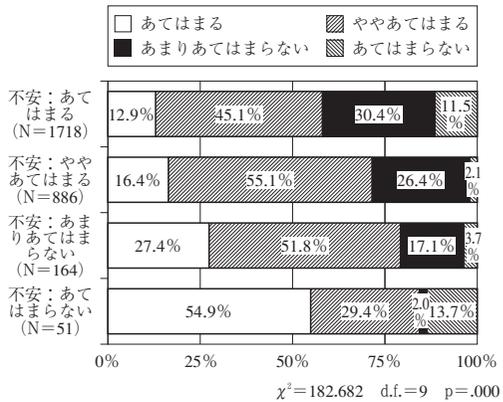


図15 将来に対する不安と生活満足度

イト)を現在している者で生活満足度が高くなっているが(図11)、〈自由に使えるお金〉の多寡それ自体で満足度に有意な差はみられなかった⁵⁾。

また、図13に示したように〈階層帰属意識〉が高いほど生活満足度も高くなっている。〈父親学歴(大卒：大学・大学院・短大・高専卒/大卒以外：中卒・高卒)〉では、大卒のほうが満足度は高い(図14)。母親学歴では、有意差は見られなかった。

自身の「将来に対する不安」では、将来に不安をもっている者のほうが、大幅に満足度が低くなっている(図15)。

(4) 自身に対する評価と生活満足度

自身に対する4つの観点からの評価と生活満足度の関係のみてみよう。〈他の人にはない特技・才能〉が自分にはあると思っている者、〈ルックスは人並み以上だ〉だと思っている

5) ただし、アルバイトを現在している者のほうが、していない者よりも自由に使えるお金は多い(図12)。

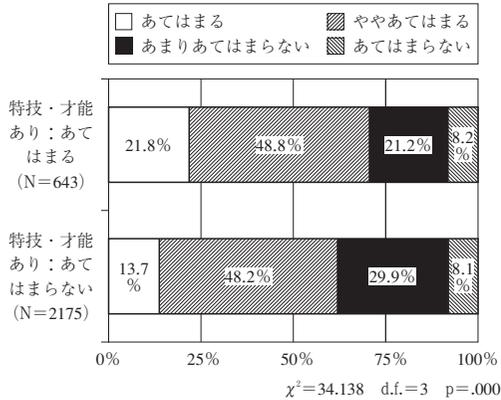


図16 特技・才能と生活満足度

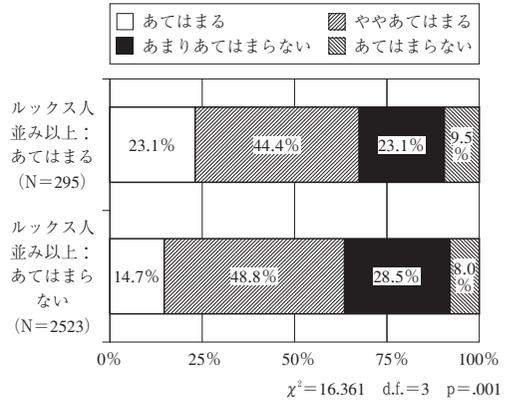


図17 ルックスと生活満足度

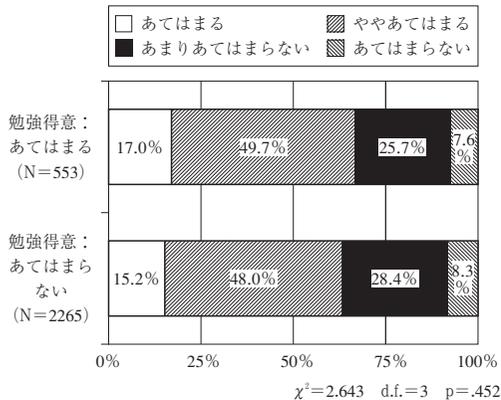


図18 勉強の得意さと生活満足度

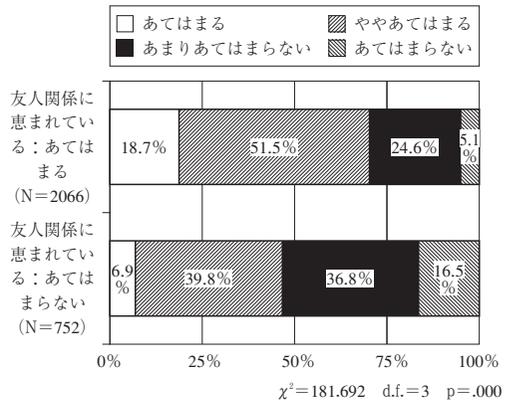


図19 恵まれた友人関係と生活満足度

者、〈自分は友人関係に恵まれている〉と思っている者のほうが満足度が高くなっている (図16・図17・図19)。しかし、図18に示したように〈学校の勉強が得意な方だ〉と思っているかどうかでは、生活満足度に有意差は見られなかった。

(5) 人間関係と生活満足度

次に、身近な人との関係と生活満足度の関連についてみてみよう。まず、恋人との交際についてである。〈現在の交際相手の有無〉では交際相手がいるほうが (図20)、〈交際経験〉ではこれまでに交際経験があるほうが満足度が高くなっている (図21)。友人関係では、〈親友〉〈仲のよい友だち〉〈知り合い程度の友だち〉のいずれも友人数が多いほど生活満足度が高い (図22・図23・図24)。家族や近隣との関係では、家族といるときに充実していると感じる者のほうが (図25)、また現在すんでいる地域に住み続けたいと考えているほうが生活満足度は高い (図26)。なお、図27のように、ソーシャル・スキルについても、その得点が高いほど生活満足度が高くなっている。

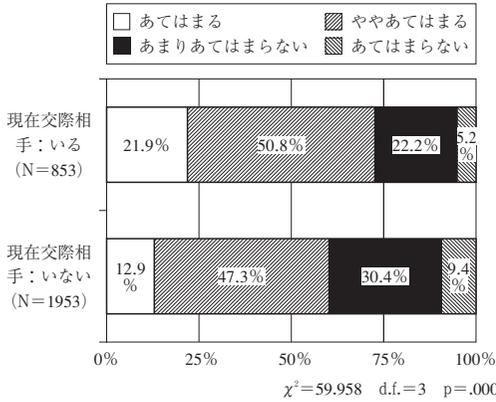


図20 現在の交際相手の有無と生活満足度

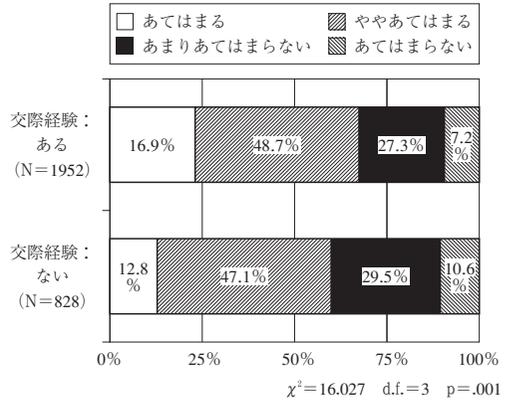


図21 これまでの交際経験と生活満足度

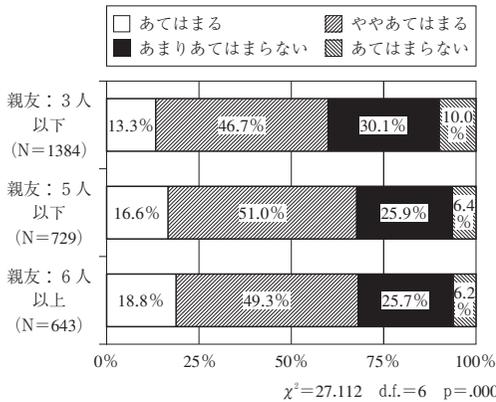


図22 親友の数と生活満足度

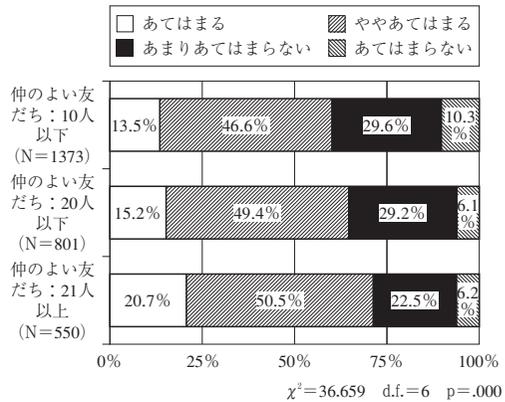


図23 仲の良い友だちの数と生活満足度

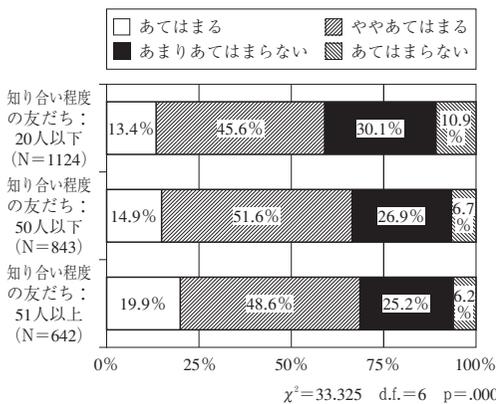


図24 知り合い程度の友だちの数と生活満足度

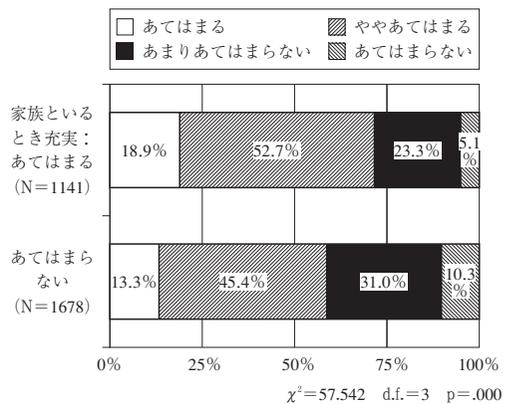


図25 家族関係と生活満足度

(6) 文化活動

スポーツや趣味などの文化的な活動と生活満足度の関係についてみてみよう。図28に示し

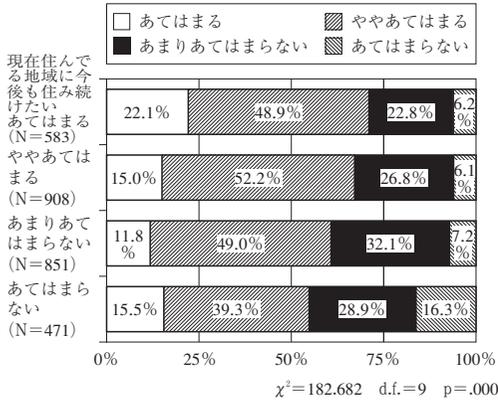


図26 現在住んでいる地域と生活満足度

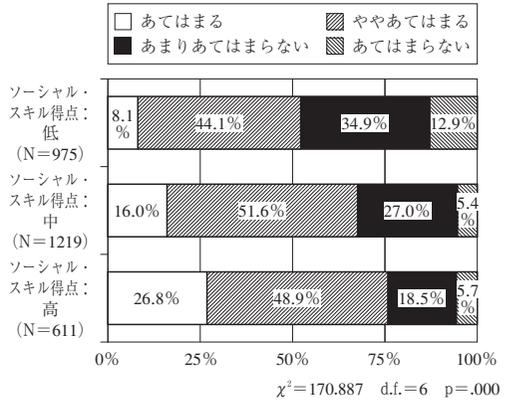


図27 ソーシャル・スキル得点と生活満足度

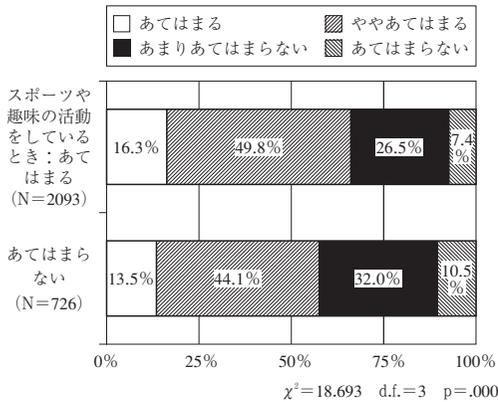


図28 スポーツや趣味の活動と生活満足度

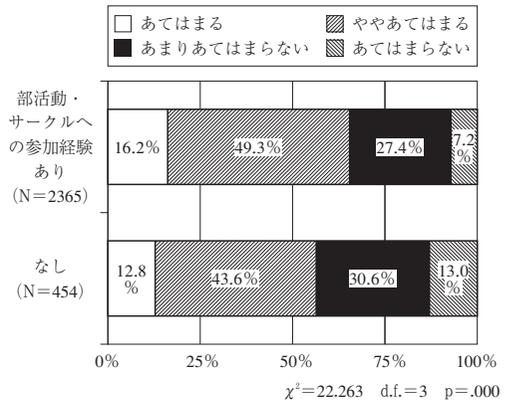


図29 部・サークルへの参加経験と生活満足度

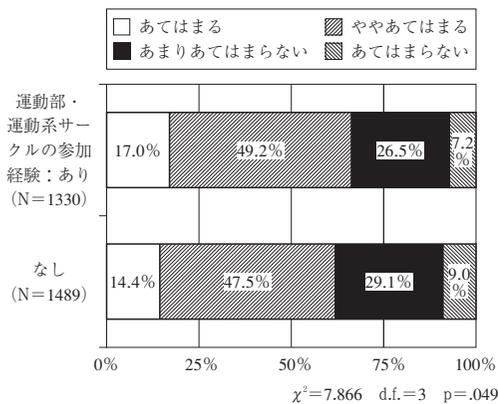


図30 運動部・運動系サークルと生活満足度

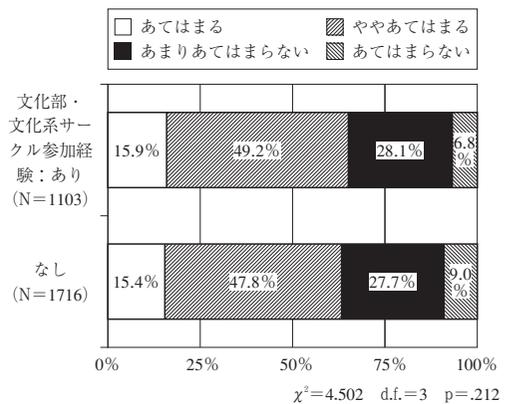


図31 文化部・文化系サークルと生活満足度

たように「スポーツや趣味の活動をしているとき」に充実感を感じている者ほど、生活満足度も高くなっている。また、「部活動・サークル活動への参加経験」がある者のほうが、生

活満足度は高い（図29）。特に、〈運動部・運動系サークルの参加〉経験がある者で、生活満足度が有意に高くなっている（図30）。

5. 大学生の生活満足度の規定要因

大学生の生活満足度の規定要因をみるため、これまでにみてきた諸変数を説明変数として重回帰分析を行った。なお、多重共線性などに配慮する観点などから、いくつかの変数は除いている。大学生の生活満足度に影響を及ぼしている要因は、以下のようになる（表2）。

確かに、現在の暮らし向きや将来への見通しの悪さなど経済的な要因は強く満足度に影響をおよぼしていることがわかる。経済的に余裕があるほど、将来への不安が少ないほど、生活満足度は高くなる傾向がある。しかし、それと同程度に、恋人や友人との関係など人間関

表2 大学生の生活満足度の規定要因（重回帰分析）

		B	β	有意確率
	(定数)	2.522		.000
基本属性	性別（男性=1 女性=0）	-.072	-.043	.039
	年齢	-.012	-.015	.434
所属大学	国公立ダミー（国公立=1 それ以外=0）	-.019	-.008	.729
	大学都市部ダミー（都市部=1 地方部=0）	-.049	-.022	.335
	偏差値	-.001	-.007	.764
	この大学が第一志望か（第一志望=1 それ以外=0）	.122	.075	.000
経済・階層	現在の暮らし向き（余裕がある=5～苦しい=1）	.124	.158	.000
	自由に使えるお金／月	.000	-.005	.795
	アルバイトダミー（現在している=1 それ以外=0）	.071	.040	.049
	父学歴（大学・大学院・短大・高専卒=1 それ以外=0）	.033	.019	.363
	母学歴（大学・大学院・短大・高専卒=1 それ以外=0）	-.003	-.002	.939
	自分の将来について不安を感じる（あてはまる=4～あてはまらない=1）	-.181	-.150	.000
自己評価	他の人になく特技・才能がある（ある=1 ない=0）	.102	.053	.009
	ルックスは人並み以上（ある=1 ない=0）	.024	.009	.652
	学校の勉強は得意（ある=1 ない=0）	.055	.027	.171
人間関係	現在の恋愛交際相手の有無（いる=1 いない=0）	.204	.115	.000
	親友数	.012	.058	.005
	仲のよい友だち数	.003	.058	.007
	知り合い程度の友だち	.000	.011	.605
	家族といるとき（充実=1 あてはまらない=0）	.178	.107	.000
	現在の居住地域に住み続けたい（あてはまる=4～あてはまらない=1）	.094	.115	.000
文化活動	スポーツや趣味の活動（充実=1 あてはまらない=0）	.142	.075	.000
	大学の文化部・文化系サークル加入経験（あり=1 なし=0）	.051	.031	.156
	大学の運動部・運動系サークル加入経験（あり=1 なし=0）	.018	.011	.606
調整済み R2 乗		0.136		
N		2372		

注）従属変数は生活満足度。「現在の生活に満足している」という問いに対する回答に、「あてはまる=4」から「あてはまらない=1」まで値を与えた。

係の良好さが、重要な規定要因となっている。

生活満足度を規定する要因として、人間関係に関する要素が重要なことは、他の年齢層を含めた分析でも指摘されている（内閣府 2007）。しかし、若者においては、特にその影響が大きいと考えられる。平成21年度「国民生活選好度調査」では、主観的幸福度だけではなく、その判断基準もたずねられており、15歳～29歳の6割が友人関係と回答している。ライフステージによる周囲の環境の違いを差し引いて考える必要があるとはいえ、他の世代でも高くても4割程度となっており、若者の主観的幸福度の基準として友人関係が重要なことがわかる。

このように、現在の大学生にとって、友人関係など人間関係の良好さが、生活満足度の高さを規定する重要な要因となっている。すなわち、雇用環境の厳しさや経済的な見通しの悪化によって押し下げられた生活満足度を、人間関係の良好さが押し上げ返すことによって、生活満足度が維持されている、と考えることができる。

6. ま と め

分析結果をみると、人間関係の良好さが、生活満足度の高さを規定する重要な要因となっていることがわかる。一時点の調査データからではあるが、雇用環境の厳しさや経済的な見

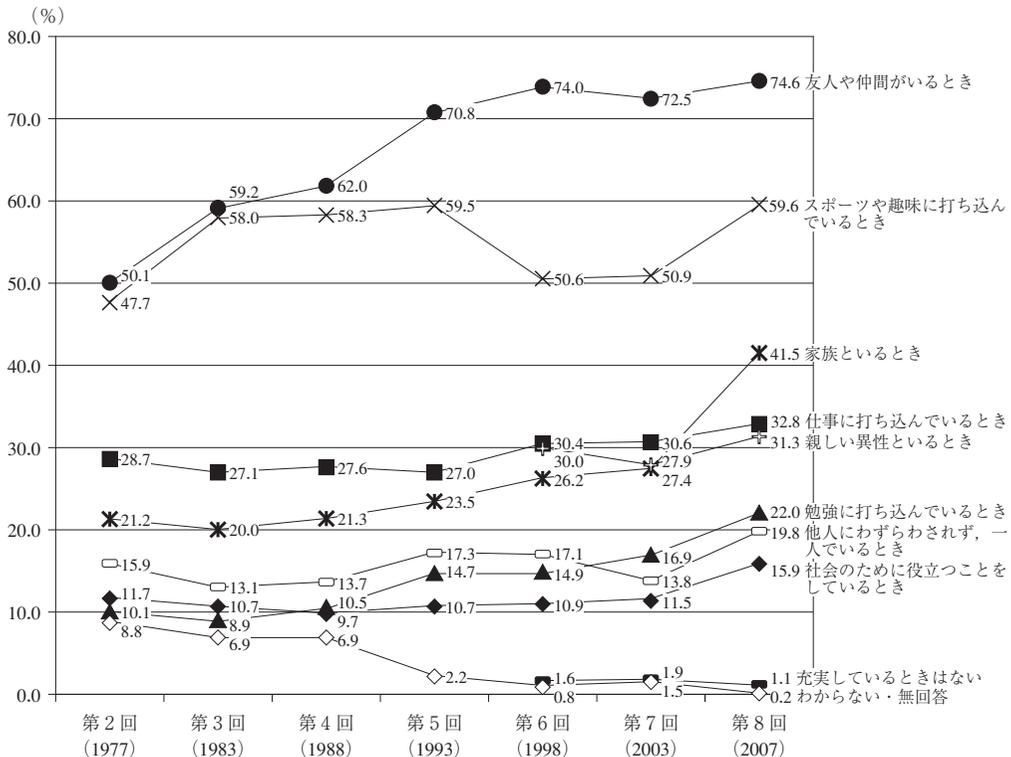


図32 普段の生活で充実していると感じるとき

資料) 内閣府「世界青年意識調査」より。

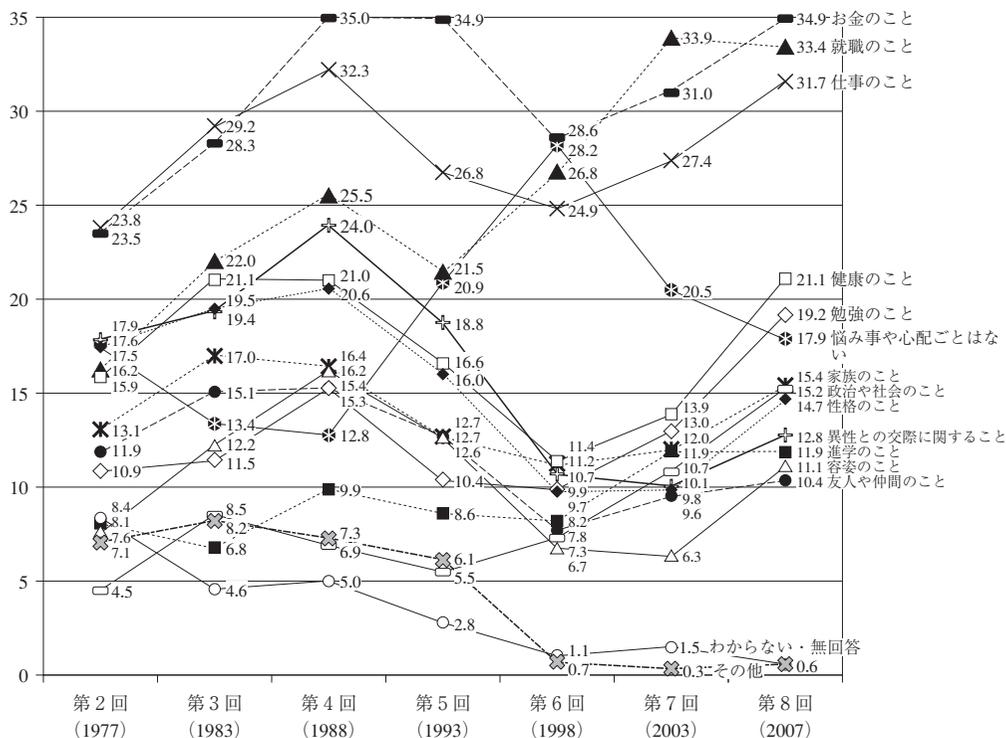


図33 若者の悩みや心配ごと

資料)「世界青年意識調査より」

通しの悪化によって押し下げられる生活満足度を、人間関係の良好さが押し上げ返すことによって、若者の生活満足度が維持されている、と考えることができるのではないだろうか。

若者の友人関係や恋愛関係のありように関しては、否定的に語られることも多いが、多くの若者は良好な人間関係を形成している⁶⁾。内閣府の「世界青年意識調査」で、友人関係に関する満足度は1983年には54.0%であったが、2003年では72.0%となっており、20ポイント近く増加している。また、同調査には、普段の生活で充実していると感じるときがどのような時かという質問がある。「友人や仲間といるとき」充実していると感じる若者は1977年には6割程度であったが、2007年には約75%となっている（図32）。

無論、生活満足度が高いからといって、若者たちが問題を抱えていないわけではない。内閣府の「世界青年意識調査」によれば、1999年代後半あたりを境として、若者の悩みごとや心配ごとは増加傾向にある。特に、増加が激しいのは「就職のこと」である。1993年には21.5%であったが、2007年には33.4%となり、10ポイント以上増加している。その他、高い割合となっているのは、「お金のこと」（2007年34.9%）や「仕事のこと」（2007年31.7%）

6) 無論、身近な人との関係がうまく築けない若者がいないというわけではない。良好な人間関係を形成している若者が多いからこそ、そうではない者は、より厳しい状況におかれているのではないかと考えられる。

表3 若者の公共性や政治・社会参加に関する規定要因

	一般的信頼	政治参加 意見表明型	政治参加 支払經由型	政治的関心	感覚 政治的有効性	相手数 政治的会話の	寛容度 ¹ (職場の他者)	寛容度 ² (身近な他者)
趣味集団 趣味縁 集団所属の多元性 高校部活経験 趣味友人		+	+			+		
ネットワー ク 仲のよい友人数 恋人交際経験		+	+			+	+	
生活意識 愛国心 生活満足度	+			+		+	-	-
メディア テレビ視聴時間 携帯メール送受信数					-			

出典) 浅野智彦, 2011, 『若者の気分 趣味縁からはじまる社会参加』 p. 111 より。

注) 青少年研究会の有志が2007年に杉並区の16歳から29歳までを対象に実施した「若者の文化と社会意識に関する調査」に基づく。重回帰分析の結果を要約したものであり、「+」は統計学的みて正の有意な関係があること、「-」は負の関係があることを示している。

であり、経済的な悩みを抱える若者が増えている。他方、「友人や仲間のこと」と回答している者も、近年若干増加傾向にあるが、その割合は低い(2007年10.4%)。無論、雇用や経済的な側面のマイナスを良好な人間関係が補完するような形で生活満足度が保たれているとしても、雇用などの問題それ自体が改善されるわけではない。むしろ、若年雇用の問題などが隠蔽されてしまう可能性も否定できない。

したがって、このような身近な人間関係に充足する若者たちに対しては、次のような批判がなされるかもしれない。すなわち、身近な人間関係に引きこもって、その狭い世界の中で充足し、外部にある社会への関心を欠いている、と。しかしながら、浅野(2010: 111)の分析などによると、必ずしもそのようには言えないようである。表3は、若者の公共性や社会的参加にどのような要因が影響を与えているかをみたものである。分析結果をみると、仲のよい友人数は、デモのような意見表明型の政治参加や寄付などの支払經由型の政治参加、そして公共性の基礎となるような異質な他者に対する寛容性を高める効果があることが示されている。生活満足度も、異質な他者に対する寛容性と同様、公共性の基礎となるような見知らぬ他者に対する信頼や政治的有効感を高める。また、生活満足度が高い方が、政治的な内容について会話する頻度も高くなっている。つまり、良好な人間関係は、社会への参加を

促す可能性がある。そして、良好な人間関係によって高められた生活満足度も公共性に関する感覚を高める可能性があることが示唆されている。生活満足度を高めている若者の良好な人間関係が閉じたものとならず、公共性にもつながるような開かれたものになるか、さらに検討していく必要があると言えるだろう。

謝辞

まずは何よりも調査に回答してくださった大学生の方々に心よりお礼を申し上げたい。また、匿名性を確保するため、お名前をあげることはできないが、調査実施にご協力いただいた各大学の教員の方々に対しても深謝を述べたい。

【参考文献】

- 浅野智彦, 2011, 『若者の気分 趣味縁からはじまる社会参加』岩波新書。
- Bauman, Zygmunt, 2008, *The Art of Life*, Polity Press. (=2009, 高橋良輔・開内文乃訳『幸福論—“生きづらい”時代の社会学』)
- 土井隆義, 2008, 『友だち地獄—「空気を読む」世代のサバイバル』筑摩書房。
- Easterlin, Richard A., 1974, “Does Economic Growth Improve the Human Lot? Some Empirical Evidence,” in Paul A. David and Melvin W. Reder (eds.). *Nations and Households in Economic Growth: Essays in Honor of Moses Abramowitz*, Academic Press, 89-125.
- 古市憲寿, 2011, 『絶望の国の幸福な若者たち』講談社。
- Frey, Bruno S. and Stutzer, Alois, 2002, *Happiness and Economics: How the Economy and Institutions Affect Human Well-Being*, Princeton University Press. (=2005, 佐和隆光監訳『幸福の政治経済学—人々の幸せを促進するものは何か』ダイヤモンド社。)
- 岩田考, 2006, 「多元化する自己のコミュニケーション—動物化とコミュニケーション・サバイバル」岩田考・羽瀧一代・菊池祐生・苔米地伸編『若者たちのコミュニケーション・サバイバル—親密さのゆくえ—』恒星社厚生閣, 3-16.
- 岩田考, 2011, 「低成長時代を生きる若者たち—〈満足する若者〉の可能性とその行方」藤村正之編『いのちとライフコースの社会学』弘文堂, 211-224.
- 松田久一, 2009, 『「嫌消費」世代の研究』東洋経済新報社。
- 見田宗介・大澤真幸, 2009, 「名づけられない革命をめぐる—新しい公共性の論理」『at プラス』(02), pp. 6-31.
- 内閣府, 2007, 『平成19年度版 国民生活白書—つながりが築く豊かな国民生活—』時事画報社。
- NHK 放送文化研究所, 2010, 『現代日本人の意識構造 [第七版]』日本放送出版協会。
- 大竹文雄・白石小百合・筒井義郎編, 2010, 『日本の幸福度—格差・労働・家族』日本評論社。
- 田中理恵子, 2011, 『平成幸福論ノート—変容する社会と「安定志向の罨」』光文社。
- Stevenson, Betsey, and Wolfers, Justin, 2008, *Economic Growth and Subjective Well-Being: Reassessing the Easterlin Paradox*, Brookings Papers on Economic Activity, Spring, 1-102.
- 山岡拓, 2009, 『欲しがらない若者たち』日本経済新聞社。
- 山田昌弘・電通チームハピネス (袖川芳之), 2009, 『幸福の方程式—新しい消費のカタチを探る』デイスカパー・トゥエンティワン。

(2014年7月4日受理)

University Students' Life Satisfaction: Determinants as Seen from a Survey of 26 Universities

IWATA Koh

The objective of this paper was to elucidate the factors that determine university students' life satisfaction based on data from a written questionnaire survey conducted at 26 universities around the country in late September and October 2010. In doing so, we examine the reasons why life satisfaction among young people in recent years has not necessarily been lower than that of other age groups as is often believed to be the case.

It is frequently said that young people face a severe employment environment and, as is highlighted by the term *tomodachi jigoku* [friend hell] (Doi 2008), have difficulties forming close interpersonal relationships. However, according to the Public Opinion Survey Concerning People's Lifestyles, when broken down by age group, young people's life satisfaction is not necessarily lower than that of other age groups. Similarly, we cannot discern any clear decline in subjective happiness. While it would be incorrect to say that there has been an increase in life satisfaction and subjective happiness, both remain at a high level. It seems that young people have recently been facing an extremely harsh environment. Why is it, then, that young people's life satisfaction and subjective happiness have not fallen?

To answer this question, after examining the relationship between university students' life satisfaction and a wide range of variables through cross tabulation, we performed multiple regression analysis using the students' life satisfaction as the dependent variable. The model included 24 variables related to basic attributes (gender, age), the specific university attended (e.g. level of difficulty to enter), economic circumstances and social class, close interpersonal relationships, and cultural activities. The multiple regression analysis yielded the following results:

- 1) Greater financial resources and less anxiety regarding the future tend to increase life satisfaction.
- 2) The presence of a significant other/partner and greater numbers of close friends tend to increase life satisfaction.

In other words, keeping in mind that the survey data are for a single time point, life satisfaction is reduced by the severity of the employment environment and the worsening economic outlook but, at the same time, increased by healthy interpersonal relationships, with the result that no change is observed in life satisfaction overall. Although young people's personal and intimate relationships are often discussed in a negative light, as can be seen, for example, from the results of the World Youth Survey, many Japanese youth develop healthy interpersonal relationships. It

is perhaps these relationships that underlie the maintenance of such a high level of life satisfaction.